

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

* カルヴィーノとアーティチョーク⑨ *

堤 康徳

大震災から一年。また春が巡ってきた。

またやってきたからといって
春を恨んだりはしない
例年のように自分の義務を
果たしているからといって
春を責めたりはしない

(沼野充義訳)

今年2月1日に亡くなったポーランドの女性詩人、ヴィスワヴァ・シンボルスカ(1923-2012)の詩「眺めとの別れ」の冒頭の一節だ。去年の4月、朝日新聞紙上のコラムで池澤夏樹氏が紹介して、広く知られるようになった。本年2月7日付の同紙文芸批評欄に、シンボルスカを追悼する沼野充義氏の記事が掲載されている。この詩を収める1993年の詩集『終わり始まり』(沼野充義訳、未知谷、1997年)は、沼野氏によれば、「社会主義政権の崩壊と長年連れ添ったパートナーの死という二重の『終わり』を経験した詩人の姿を示すもので、奇しくも昨年(2011年)の三月十一日の大震災以降の日本人の心に強く訴えかけるものになった」という。

春を告げる花のなかで、花に疎い無粋な私でもすぐに思い浮かべるのは、水仙、福寿草、沈丁花、そしてミモザ。早春の鎌倉をイタリアの友人と訪れたさい、水仙と福寿草の名所として知られる瑞泉寺を案内したことがある。沈丁花は、個人的に

その芳醇な香りが好きなので、自宅の狭い庭に2本も植えている。淡紅色の花と、白い花を咲かせる木を1本ずつ。



【タブッキのエッセイとシンボルスカの詩集】

3月8日の「国際女性デー」に、イタリアでは、ミモザの黄色い花を母や妻や恋人たちに贈る習慣がある。イタリアにおけるミモザの生産の大半は、リグーリア州インペリアー帯で行われていると

いう。インペーリアは、やはり花の栽培のさかんなカルヴィーノの故郷、サンレモから東に約 20km の海沿いの町。作曲家ルチアーノ・ベリオ (1925 - 2003) は、この町の生まれだ。ベリオは、カルヴィーノが台本を書いたオペラ『耳を傾ける王』(*Un re in ascolto*) や、ジェノヴァ生まれの詩人エドアルド・サンガイネーティ (1930 - 2010) のテキストに基づくシアター・ピース『迷宮 II』(*Laborintus II*) などの作品で知られる。

一昨年、旅行記の熱心な読者であるというアントニオ・タブッキ自身の旅行記 (*Viaggi e altri viaggi*, Feltrinelli, 2010) が出版された。その旅は五大陸すべてに及ぶ。文字どおり世界を歩いた旅人タブッキは書いている。「世界は大きくて多様である。だからこそ美しいのだ」と。また、この本で作家は、旅を語りながら、自作の読解の鍵を思わず読者に手渡してくれた感もある。本書は、旅を主要なテーマのひとつとするタブッキ文学の手引書でもあるのだ。

この本のなかに、「京都、書の町」(*Kyōto. Città della calligrafia*) と題された京都滞在記がある。タブッキが国際交流基金の招きで、ポルトガル人の夫人とともに日本を訪れたのは、1997 年 11 月のことだった。私も、原宿のオープン・カフェでタブッキ本人と話をする機会に恵まれた。タブッキは、私のぶしつけな質問にも終始穏やかに答え、私が持参した彼の短篇集『とるにたらない小さな誤解』の中表紙にサインまでしてくれた。日付は 11 月 5 日。同じ日の夜、東京九段のイタリア文化会館で、タブッキの作品の翻訳者でもある須賀敦子さんとの公開の対談が行なわれた。タブッキは、須賀さんが、彼の愛読する谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』のイタリア語翻訳者と知って驚いたようだった。翌年 3 月の桜の花がほころび始める頃に永眠された須賀さんは、体調がそのときすでにすぐれず、入院している病院から駆けつけていた。

タブッキ夫妻が京都に向かったのはその翌日だっただろうか。円通寺の苔庭、一休の書で知られる大徳寺、金閣寺などを見学したあと、谷崎潤一郎の墓のある法然院を訪れている。銀閣寺に近い法然院の墓地に、谷崎の墓があることは私も知らなかった。昨年の 10 月、同志社大学で開か

れたイタリア学会に出席したあと、私もタブッキにならって、谷崎の墓参りをしてきたが、そこに観光客は誰もいなかった。



【谷崎潤一郎の墓】

「谷崎の墓は、裸の土のうえに置かれた大きな石だった」とタブッキは書いている。地面は赤いモミジで覆われていたという。

石には漢字一文字が刻まれ、彩色されていた。私はできるだけ正確にそれを手帳に書き写し、その日の夜、英語を完璧に話すレセプションの従業員にそれを見せた。「どういう意味ですか？」と私は尋ねた。「静寂です (*Silence*)」と彼は答えた。そのあとで、かすかにほほ笑みながらつけ加えた。「あるいは、<無> (*Nothing*) でしょうか、サー」(p. 84)

谷崎の墓石には、「寂」の一文字が刻まれているのである。

ところで、このエッセイをタブッキは、シンボルスカの詩の引用から始めているのだ。1967 年の詩集『百の喜び』所収の「あるホテルで書かれたもの」(*Scritto in un albergo*) と題された作品がそれである。

京都は幸運に恵まれている、
幸運と建物に、
翼のような屋根、

音階のような階段に。
古いがなまめかしく、
石造りだが躍動し、
木造だが、
天から地上に向かって伸びているみたい。
京都は美しい町
涙が出るほどに。

ある紳士が
本当の涙を流した、
いにしへの文物の理解者、愛好者が、
山場を迎えた
会議の席上で
叫んだ、
結局、より劣った町はたくさんある—
そしていきなり泣き出した
椅子に坐ったまま。

こうして京都は救われた
広島より格段に美しかったので。

この詩にはまだ続きがあるが、タブッキの引用
はここで終わっている。タブッキが参照したのは、
ポーランド文学者ピエトロ・マルケザーニのイタリ
ア語訳である(Wislawa Szymborska, *Uno Spasso*, a
cura di Pietro Marchesani, Milano, Libri Scheiwiller,
2009)。

この作品は、京都の美しさへのオマージュであ
るとともに、あるいはそれ以上に、京都よりも美し
くなかったために原爆の標的にされた広島の悲
劇をアイロニカルにうたった、きわめて痛烈で哀
切な挽歌なのである。

3月1日、スイスのモントレーで、シンガーソ
ングライターのルーチョ・ダッラが心臓発作のため
急逝した。サンレモ音楽祭に参加したあと、ひと
月に及ぶコンサートツアーに出っていたダッラは、3
月4日に69歳の誕生日を迎えるはずだった(4

marzo は彼の代表作のひとつ)。彼が残したたくさ
んの名曲のなかでいちばん好きな歌はと聞かれ
たら、私は *Piazza Grande* を選ぶ。



【ダッラのアルバム】

今回は、明るい話題にしようと思っていたが、
死者のことはかり書いてしまった。カルヴィーノの
京都訪問については、いずれとりあげたい。

(翻訳家、慶應義塾大学講師)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑫』

～ツール初の勝者はイタリア人？～

谷口 和久

●初のツール・ド・フランス優勝者はイタリア人？

今年(2012年)で99回目を数えるツール・ド・フランス。これまでの総合優勝者(3週間にわたる全日程で最もトータルタイムが少ない選手)のリストに名を連ねるのは57名になる。なぜ99名ではないのかというと、一人で何回も総合優勝をかっさらった選手が数名いるためである。

57名のうち、イタリア人は6名。もっと多いものかと思っていたが、意外と少ない。1920年代にオッタヴィオ・ボッテッキア、1930～40年代にジーノ・バルタリ、続いてファウスト・コッピ。これら3名はいずれも複数回の優勝を誇る。1960年代にはガストーネ・ネンチーニ、フェリーチェ・ジモンディ、そして1998年マルコ・パンターニ、以上の6名である。ところが、実際にはもう1名、“元”イタリア人が総合優勝リストに名を連ねているのである。その男の名はモーリス・ガラン “Maurice Garin”、ツール・ド・フランスの初代チャンピオンである。



【左から2人目、白いシャツがモーリス・ガラン】

●移民時代の落とし子

ガランは1871年、イタリアの最西北端に位置するヴァッレ・ダオスタ州アルヴィエの生まれ。こ

のあたりはアルプス山麓ののどかなエリアである。文化的・言語的には、フランスと国境を接していることもあり、フランスのそれにきわめて近い。アルヴィエ “Arvier” という地名からして、つづりや響きがフランス語的だ。統計を見ると、ここアルヴィエはガランの生まれた1870年ごろをピークに人口が減少しており、ことに20世紀初頭には一気に2割あまりも人口が減っている。当のガラン一家も1885年にはアルプスをはさんだフランス側に移り住み、さらにはベルギー国境近くまで生活の拠点を移したこともある。いずれも、より良い生活を求めてということで、山間の生活はのどかとはいえ、やはり生計を立てるには厳しいものがあつたのだろう。

フランス各地を転々としていた1892年、一説には1901年という説もあるが、ガラン21歳の年にフランス国籍を取得した。

映画「ゴッド・ファーザー」でマーロン・ブランド演じるころのヴィート・コレオーネがシチリアからアメリカに移住したのも1901年という設定になっており(注:移住時点は幼少期であったので、もちろんブランド自身は移住シーンは演じていない)、19世紀末～20世紀初頭というのは「移民の時代」でもあつた。日本からハワイやブラジルに移民が海を渡つたのも、ほぼ同時代の話である。



【ヴィート・コレオーネ アメリカ入国のシーン】

フランスに移り住んだガランは、煙突掃除人として生計を立てた。同じころ自転車を購入し、はじめのうちはレースに出ることはなかったものの、街中をグルグル走り回って、近所の住人から「どうかしちやってるのでは?!」と奇異の目で見ら

れるほど、自転車に熱中していた。身長 163cm と、当時としても小柄なガランであったが、持ち前の持久力でメキメキ実をつけていった。

この頃のガランにこんな逸話がある。当時まだアマチュアだったガラン、とあるレースに参加すべく行ってみると、プロ限定のレースだった。出場選手たちがスタートした後、あとからスタートしたガランは、前を行くプロたちを追い抜いて、なんと優勝してしまったのである。しかしながら、ガランがプロでないことを理由に優勝賞金を出し渋る主催者に対して、観客たちは「ガランこそ真の勝者！」と大ブーイング。そんな騒動もあって、ガランは正式にプロ登録することにしたのであった。

●ツール・ド・フランス初代王者

フランスのレースで活躍していたガランに、いよいよ檜舞台が用意された。ツール・ド・フランスの開幕である。1903年7月1日、パリ南郊のモンジュロンを出発して、リヨン、マルセイユ、ボルドーとぐるっとフランスをまわり、そして再びパリへと戻る、全行程 2428km のサバイバル・レースであった。ガランは、2位に約3時間もの大差をつけて、みごと優勝を飾ったのであった。



【ツール優勝で満面の笑みのガラン(中央)】

この時のツールでは、1日の行程は短いもので268 km、長いものとなると467 kmにもなり、夕方スタートして翌日ゴールするという長丁場であった。夜間の走行は危険極まりないものであり、その危険をさらに増大させるものとして「あまりに熱狂的なサポーター」の存在があった。このサポーターたち、ただ単にひいき選手を応援するだけではなく、ライバル選手の走行をじゃますべく、石を投げつけたり、道に釘をバラまいたり、もう「無法状態」といいいい有様。そんな中を、自転車レース黎明期の選手たちは文字通り「サバイバル」していたのである。

●ツール・ド・フランス初代〇〇〇にも・・・

さて、栄えある初代ツール優勝者に名を遺したガランは、当然のごとく翌年のツールにも出場し、これまた当然のごとく2年続けて優勝を飾った。

ところが、これにはとんでもない後日譚がつく。ツール終了から4か月もたった11月のこと、フランス自転車連盟は、ガランを含む11人の選手を不正行為をはたらいたかどで失格とし、ガランは総合優勝の栄誉も剥奪されてしまったのである。不正行為とはこうである。夜陰に乗じて、コースをショートカットしたり、途中で電車に乗り込んでまたゴール近くで自転車に乗り換えたり、伴走車につかまって曳いてもらったりということであった。

偶然の一致だが、同じく1904年に行われた第3回オリンピックの男子マラソンで、炎天下で倒れて救急車に収容された選手が、故障で停まった救急車から飛び降りて再度コースを走り出し、なんとトップでゴールイン。表彰式でしゃあしゃあと金メダルを受け取ろうとしていたまさにその時に不正を暴露され、競技から永久追放されるという珍事件があった。ガランをかばうわけではないが、今からして見れば、いずれもなんと「のどかな」時代の風景だ。

ガランは2年間の出場停止処分となったが、すでに33歳のガランにとって2年間のブランクは大きすぎ、事実上これが彼の引退となった。ガランは、ツール初代王者に加え、ツール初代「優勝剥奪者」としても(不名誉な)名を遺したのだった。

●存亡の危機から生まれた「山岳コース」

主催者サイドも、このスキャンダルでツールの

評判悪化を憂慮し、一時はツールの存続すら危ぶまれた。事実、主催者はいったん「ツール終結」の声明を出したほどであった。

ネックとなったのは夜間の走行だった。当時は他のレースでも長距離・夜間走行が多く取り入れられていた。ひとつには、これがレースにおいて選手間の差をつけ、ひいてはレースを盛り上げる要素と考えられていたのである。

距離で差がつけられなければ、何で差をつけるか。検討の末、取り入れられたのが「山岳コース」であった。翌1905年、アルザス地方のバロン・ダルザス(標高 1178m)という山がコースに組み込まれ、以降、山岳コースがツールをはじめとしたステージ・レース(ツールやジロのように長距離を何日間にもわたって行われるレース)には、なくてはならないものとなったのである。言うなれば、ガランたちの不正行為が、レースを盛り上げる最大の「山場」を生み出したということだ。

『Ciclismo, Storie Segrete』(Beppe Conti, ECO, 2003)

『A Century of Cycling』(William Fotheringham, Motorbooks Intl, 2003)

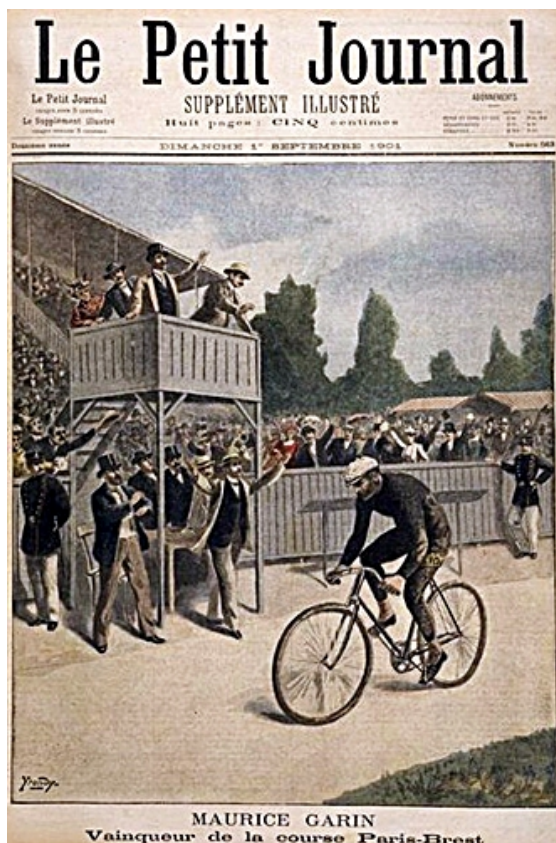
『ツール 伝説の峠』(安家達也, 未知谷, 2005)

『サイクルスポーツ 2003年9号別冊 100周年 ツール・ド・フランスのすべて』(八重洲出版, 2003)

『丸ごと 100年ツール・ド・フランス』(柘出版社, 2003)

『別冊 1億人の昭和史 昭和スポーツ史』(毎日新聞社, 1976)

wikipedia 関連情報



【当時の様子を伝える新聞、描かれているのはガラン】

(当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 無料体験レッスン

4月より開講の春期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校: 日本イタリア京都會館

3/31 (土) 11:00~12:30
3/31 (土) 13:00~14:30
4/ 2 (月) 11:00~12:30

● 四条烏丸: ウイングス京都

4/ 3 (火) 19:00~20:30

● 梅田: 大阪駅前第4ビル

4/ 1 (日) 13:00~14:30
4/ 4 (水) 15:00~16:30
4/ 4 (水) 19:00~20:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 4/ 7 (土) 15:30~17:00
会場: 日本イタリア京都會館 本校
講師: 当館スペイン語講師

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

日時: 4/ 4 (水) 10:30~12:00
会場: 日本イタリア京都會館 本校
講師: 当館ポルトガル語講師

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都會館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/